

止観第五の事

文永六年一二月二二日 四八歳

止観しかん第五の事、正月一日辰の時読此をよみはじめ候。明年は世間そうそう忽々なるべきよし皆人申すあひだ、一向後生いっこうのために十五日まで止観を談ぜんとして候が、文あまた候はず候、御計らひ候べきか。

白米一斗御志申しつくしがたう候。鎌倉は世間渴かつして候、僧はあまた数多在をはします、過去の餓鬼道がきどうの苦をばつぐ償のわせ候ひぬるか。

法門の事、日本国に人ごとに信ぜさせんと願して候ひしが、願や成熟せんとし候らん。当時は蒙古かんもんの勘文によりて世間和やわらぎて候なり、子細ありぬと見へ候。本より信じたる人々はことに悦ぶげに候か。恐々謹言。

十二月二十二日

日 蓮 花 押

母尼御前ごぜんにはことに法華經の御信心のふかくましまし候なる事、悦び候と申させ給たび候へ。